

# 科学と芸術の接点

## 美術作品の価値を高める照明

美術館の照明には、価値を高めるといふ側面と価値を損なわないといふ側面がある。いわゆる展示と保存といふ美術館の持つ二面性を照明も背負わされている訳だ。その中で、意外に思うかもしれないが、西欧では価値を損なわないことが主軸であるのに対し、日本は価値を高めることに貪欲である。しかし、印象評価として西欧の美術館のほうが評価の高いことが多い。それは何故だろうか？

また、現在、LEDを中心とした固体素子照明（=SSL (Solid-State Lighting)）は、日本において異常なほどのフィーバー状態にある。美術館も同様に、ここ数年の拡がり「凄まじい」の一言だ。この状況は美術作品にとって本当に良いことなのか？

これまでの美術館照明は、予め担保された光源を使用することにより、その質は良くも悪くもある程度均質化されてきた。しかし、SSL光源は製造者による違いが大きく、担保しようにも何をすべきか見えていないのが現状である。

日本に先行して訪れたSSL照明時代の今、必要とされる光の質をマニュアル化し、製品化することは、日本によりよい美術館を増やすだけでなく、これから遅れて訪れるであろう世界的なSSL展示照明の基準化として大変大きな意味をもっている。

2013年 **5月14日** (火) 16:30 ~ 18:00

慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎1階シンポジウムスペース

参加費：無料（学生の来場歓迎）

会場準備の都合上、塾外の方は事前申し込みをお願いいたします



講師：藤原 工氏

◇株式会社灯工舎 代表取締役・岡山県立大学デザイン学部 非常勤講師

1968年姫路出身。1991年筑波大学芸術専門学群卒業（生産デザイン専攻）。松下電工（現パナソニック）入社。照明デザイナーとして、全国のテーマパーク、ミュージアムを担当。2011年退社。2012年（株）灯工舎設立。岡山県立大学デザイン学部非常勤講師。展示における光環境と光文化を研究している。照明学会「日本のあかり文化調査委員会」幹事、照明文化研究会 編集委員、日本色彩学会会員。

著書としては「学芸員の為の照明ハンドブック（仮題）（講談社 2013年6月出版）」ほか、監修書籍として「あかりの大研究（PHP研究所 2010/11/2）」がある。

詳しくは、<http://www.lightmeister.co.jp/>

